

[国 語]

物語教材における読解力を高める指導方法の工夫

－クライマックスの一文検討を通して－

倉又 圭佑*

1 はじめに

国語科で養われるべき力に読解力がある。国語教育指導用語辞典¹には、「読解力とは、文章に接触し、文章に内包された情報を、読者と書き手が共有するコード（伝達行為）と読者に既存の知識・情報および経験とを手がかりとしながら読解し、それを理解し、解釈するに至る、読者の一連の行為を指す概念である。」と書かれている。このことから、読解力は手がかりを基にしながら、文章の意味を正しく理解する力であると言える。読解力は国語科のみならず、全ての学習の根幹となる力である。

国語科には物語教材や説明文教材、詩教材、伝統文学教材があるが、教科書で扱われる内容の数や時数から考えると、主に物語教材と説明文教材の単元において読解力が養われると言える。そのため、この2種類の教材をいかに指導するかが重要である。

しかし、この2種類の教材を比較したときに、説明文教材の方は表現方法、段落構成、要点、要旨など、教えるべき内容が明確である。教材が変わっても、指導方法が大きく変わることはない。間嶋（2008）²が提案するように、筆者の問いの文を見つけ、対応する答えを探し出し、構成図にまとめる単元の流れが構成でき、読み方を明確に指導できるという点において、読解力を高める指導がされやすい。

一方、物語教材の指導はというと、何をどのように教えたらよいか曖昧である。例を挙げるとすれば、「大造じいさんとガン」と「わらぐつの中の神様」（光村図書5年生）で共通する具体的な指導方法や、他の物語教材にも生かされる読み方を明確に答えることは難しい。そのため、場面毎に読んでも、感想をまとめる授業をしてしまったり、「劇をつくろう」や「朗読会を開こう」など、活動が中心となって終始する授業をしてしまったりすることがある。これらの活動では、児童が思いのままに読み取り、交流し合えるよさがあるが、反面、文章の意味を正しく理解して読み取ることも、感性を大切にすることに比重が置かれ、読み深めるまでには至らないであろう。故に、読解力を高めることは難しい。

学習指導要領³では「読むこと（高学年）」において、指導事項に「優れた叙述について自分の考えをまとめることができる」と記載されている。このことから、叙述に沿って考えることに重点を置いた指導方法が必要であろう。求められるのは、どの物語教材でも共通した指導方法である。それがあれば、説明文教材のように読み方を明確に指導できるはずである。

そこで本研究では、どの物語教材でも共通する指導方法を考察し、それが読解力の向上に繋がるのかを検証する。

2 研究の仮説

物語教材は、作品を読んだときに、あらゆる解釈があり、答えが1つではないと言われることがある。しかし、それが指導の曖昧さを生じさせている。もし、算数の問題のように、答えが1つだとすれば、明確な指導ができるはずである。また、児童らも明確な目的をもって作品を読むであろう。故に、1つの答えを導き出せる指導方法を確立したい。

そこで注目したのが、クライマックスの検討である。クライマックスとは、しばい・事件などの緊張感が最も高まった場面のことであり、作品で言えば山場のことである。その中でも、クライマックスの一文を検討する指導方法を二瓶（2011）⁴は提案しており、基本的には答えが1つであるという点において、本研究に適している。二瓶によれば、クライマックスの一文は「物語全体を通して、あること（中心人物の心）が最も大きく変わる場所」だと言う。

* 糸魚川市立糸魚川小学校

これがどの物語教材でも有効であるならば、指導方法は明確になり、共通した指導ができるようになるだろう。そして児童自身が作品の読み取り方を理解できるようになり、読解力が向上するであろう。

3 研究の内容・方法

平成24年度の10月から平成25年度の10月までの1年間にかけて、4つの物語教材の実践において、クライマックスの一文検討を行った。平成24年度には3学年39名を対象に、「三年とうげ」、「サーカスのライオン」、平成25年度からは第5学年30名を対象に、「世界でいちばんやかましい音」、「うさぎのさいばん」で実施した。実践の中で、その都度必要だと考えられる手立てを講じ、実践を繰り返す中でよりよい指導方法を明らかにしていった。

読解力については、ビデオで記録した児童らの発言やワークシートへの記述から検証した。

4 実践

実践1 「三年とうげ」李錦玉（光村図書3年）

[手立て① 物語の中で一番盛り上がる場面を探す]

この作品は、多くの物語に共通している四部構成を備えながら、短くとらえやすくまとめてあり、作品の組み立てを学ぶのに適した教材である。4つの場面に分けると、設定場面、展開場面、山場場面、結末場面に分けることができる。この山場場面をクライマックス場面として探す。

[手立て② クライマックスの一文の定義を明確にする]

クライマックスの一文は、「中心人物の気持ちが大きく変わったところ」とであると指導する。中心人物の気持ちが描かれている文に傍線を引かせ、その中で一番気持ちが変わっていると考えられる一文を発表させる。

手立て①を講じると、クライマックス場面は容易に見つけることができた。

②を講じた上で、児童がクライマックスの一文であるとして挙げたのは次の4つの文である。

- ・そして、ふとんからはね起きると、三年とうげに行き、わざとひっくり返り、転びました。
- ・おじいさんは、すっかりうれしくなりました。
- ・あんまりうれしくなったので、しまい、とうげからふもとまで、ころころころりと、転がり落ちてしまいました。
- ・「もう、わしの病気はなおった。百年も二百年も、長生きできるわい。」

この4つの文からクライマックスの一文を検討した。

C：「そして、ふとんからはね起きると、三年とうげに行き、わざとひっくり返り、転びました。」は、まだおじいさんの気持ちがどうなったか分からないよ。

C：「もう、わしの病気はなおった。百年も二百年も、長生きできるわい。」も、もう元気になっちゃった後の話だね。元気になってなかったら、たくさん転んでないから、転んでいるところがクライマックスだと思う。

C：じゃあ、「あんまりうれしくなったので、しまい、とうげからふもとまで、ころころころりと、転がり落ちてしまいました。」がクライマックスだと思う。あんまりって、あまりにもっていうことでしょ？おじいさんの気持ちが一番大きく変わっている。

C：私もそう思う。一番元気な感じがする。

T：では、「あんまりうれしく」なる前は、まだ元気じゃないんだね？

C：いや、でも「あんまりうれしくなった」って一番大きく変わったってよりは、一番テンションが高いみたいな感じじゃない？

C：「すっかり元気になりました」の方が変わっているんじゃないかな。元気じゃなかったんだから。

T：すっかりはどういう意味？

C：すっかりの意味は、全部って書いてあるよ。

C：もう、ここで元気になったってことか。

C：でも、元気になったっていったら、トルトリの話で転べば長生きできるって聞いたところで、もう半分元気になっていたんじゃないかな。

C：どっちもクライマックスじゃない？

考察1

クライマックスの一文を検討するためには、まず物語の構成を理解する必要がある。物語を四部構成に分け、その中の山場場面をクライマックス場面として、クライマックスの一文を探した。これにより探す範囲が絞られ、児童らにとって考え易くなった。このことから、検討する前には物語を四部構成に当てはめて考えてから考えるという手立てが有効であると分かった。

しかし、クライマックスの一文検討では、4つの文が挙げられたが、児童らの検討では最終的に一文に絞ることができなかつた。ここで大きな課題となったのは、クライマックスの一文は、中心人物の気持ちが変わったきっかけの一文なのか、変わったことが明らかに分かる一文なのかということである。今回の検討では、「トルトリが転んで長生きできると言わなかったら、おじいさんは元気にならなかったんだから」と考え、授業の後半はトルトリの台詞がクライマックスの一文と考える児童が多数いた。

これは糸魚川小学校校内研究収録で山崎 (2012)⁵ が「大造じいさんとガン」でクライマックスの一文を検討した実践でも同じことが起こっている。山崎は「クライマックスの一文の定義を二瓶氏の提案同様に、中心人物の心が最も大きく変わったことが分かる文とした。そこで担任も含め、子どもたち全員が最後まで悩んだことは、変わったきっかけの文なのか、変わったことが書かれている文なのかということだった。これをはっきりさせなかったために、論点が違う検討になってしまった。その結果、クライマックスの一文が明らかにならなかった。」と述べている。クライマックスをどのように捉えるかを明確にすることが大きな課題である。今後の手立てとしては、「中心人物の気持ちが最も大きく変わったことがわかる一文」だけでは、解釈によって幾つもの一文が当てはまってしまう可能性があるため、更に考える拠り所を用意することが必要である。

そこで、白石 (2011)⁶ が提案する「何が、どうして、どのように変わったのか」を明確にした一文要約を完成させ、それを手立てにして、クライマックスの一文を検討させてはどうかと考えた。物語は、設定場面とクライマックス場面、または結末場面で中心人物の変化が描かれている場合が多い。それを対比して読むことで、「何が、どうして、どのように変わったのか」を明らかにすることができる。「三年とうげ」であれば、「三年とうげで転び病気になったおじいさんが、トルトリの言葉によって、三年とうげで再び転び、元気になる話」と一文で要約することができる。この一文要約を基にクライマックスの一文を考えるとすれば、「おじいさんが、トルトリの言葉を聞いた後に、再び三年とうげで転び、元気になったことが分かる一文」がクライマックスの一文となる。このように一文要約を手立てにすれば、論点にずれが生じることはなくなるはずである。

実践2 「サーカスのライオン」川村たかし (東京書籍3年上)

[手立て① 物語が一番盛り上がる場面を探す]

[手立て② クライマックスの一文の定義を明確にする]

[手立て③ 中心人物の変化を2つの場面で対比して明らかにする]

物語の変化を場面の対比で明らかにすることで、「中心人物の何が、どうして、どのように変わったのか」を一文要約する。

「サーカスのライオン」の中心人物はライオンのじんざである。じんざの変化を設定場面とクライマックス場面で対比することによって、中心人物の心情の変化を捉えていった。物語の変化をまとめると次のようになった。

【中心人物の何が変わったのか】 年老いたじんざの心と体

【どのように変わったのか】 若返った

【どうして変わったのか】 男の子との出会いによって

これを一文要約すると、「年老いたじんざが、男の子との出会いによって、若いときの力を取り戻す話」とまとめられた。これによってクライマックスの一文は、「じんざが、男の子との出会いの後に、若いときの力を取り戻したことが分かる一文」ということになる。この手立て③を講じた上で、児童がクライマックスの一文として挙げたのは次の3つの文である。

- ・ウオーツ
- ・ぴかぴかにかがやくじんざだった。
- ・金色に光るライオンは、空を走り、たちまち暗やみの中に消え去った。

この3つの文からクライマックスの一文を検討した。

- C：「金色に光るライオンは…の一文だと思う。だって、年老いていたのに、金色に光っているわけだから、じんぎは変わっている。
- C：「ぴかぴかにかがやくじんぎだった。」ってのも、かがやいているわけだから、じんぎは変わっているよ。
- C：「ウォーッ」だけじゃ変わったことが分からないな。
- C：でも、変わっていると思う。力のかぎりさけんだんだもん。前だったらそんなことはできないよ。
- C：ぴかぴかとか金色のじんぎって、もうじんぎが男の子を助けるために死んでしまったってことでしょ。
- C：みんなには炎が、じんぎに見えたってことじゃないかな。
- C：だとすると、もうじんぎの気持ちじゃなくて、それを見ている人の気持ちだよ。
- C：若返ったことが分かるのがクライマックスでしょ。クライマックスは「ウォーッ」だよ。これで男の子が助かったんだもん。
- C：何か、じんぎがかわいそう。男の子を助けるつもりだったのに、自分が死んでしまうなんて。
- C：でも「金色に光るライオンは、空を走り、たちまち暗やみの中に消え去った。」ってことは、後悔はしていないんじゃないかな。金色に光っていたんだもん。後悔していたら光っていないと思う。

考察2

手立て③によって、じんぎが若返ったことが分かる一文に行き着くことができた。一文要約は、論点を明確にすることができ、クライマックスの一文を探す大きな手立てとなることが分かった。

また、検討の中では作品の視点について考えることができた。児童らは、誰の視点で描かれている文なのかを考えることにより、中心人物の気持ちなのか、それ以外の登場人物の気持ちなのかを分けて読み取っていった。これは「もうじんぎの気持ちじゃなくて、見ている人の気持ちだよ。」という発言から分かる。文章の意味を正しく理解したことで、区別できたのだと考えられる。

このことから、クライマックスの一文検討は単なる一文探しではなく、叙述に沿って考えるようとする態度を身に付けさせるとともに、物語の一文一文を細かに読み取っていく力を養うことができる指導方法であることが分かってきた。これは読解力の向上に繋がると言えるであろう。

もし、実践2で講じた手立てによるクライマックスの一文検討が、他学年の他多教材でも有効であることが明らかになれば、どの物語教材でも有効な指導法となり得る可能性が高くなる。実践を重ねて、この指導方法が有効であることを明らかにしていくことが必要である。

実践3 「世界でいちばんやかましい音」ベンジャミン・エルキン（東京書籍5年下）

- [手立て① 物語が一番盛り上がる場面を探す]
- [手立て② クライマックスの一文の定義を明確にする]
- [手立て③ 中心人物の変化を2つの場面で対比して明らかにする]

これまでと同じ手立てを行った上で、物語の変化をまとめると、次のようにまとめることができた。

【中心人物の何が変わったのか】王子様の気持ち

【どのように変わったのか】やかましい音ではなく、静けさを好むようになった

【どうして変わったのか】全くの沈黙によって聞こえた自然の音で

これを基にして、一文要約をすると「やかましい音が聞きたかった王子様が、自然の音を聞いたことによって、静けさを好むようになった話」とまとめることができた。このことから、王子様の気持ちが最も大きく変わったことが分かる一文を探した。その結果、次の2文に絞ることができた。

- ・まさか！と思いました、間違いありません。
- ・王子様がうれしそうに手をたたいているのです。

この2文からクライマックスの一文を検討した。

C：「王子様がうれしそうに手をたたいている」ということは、自然の音を聞いて、喜んだことが分かるから、この一文がクライマックスだ。

C：「まさか!と思いました、間違いありません。」って何のことか分からないよ。

C：主語が書いてないよね。

C：でも、なぜここで「まさか!」なのかな？

C：考えていたことと反対のことが起こったときが、まさかだよ。信じられないってこと。

C：考えていたのは、王子様が世界一やかましい音を聞けなかったから、残念がるってことだよ。でも違った。

C：それが「まさか!」なんだ。しかも間違いのないって書いてある。

C：もうここで王子様は喜んだって分かるんじゃないかな。だからこれがクライマックスの一文だ。

考察 3

第5学年でも第3学年同様に指導することができたことから、他学年の他教材でも可能であることが分かった。また、手立て①②③を講じた上で、クライマックスの一文検討をする指導方法は、これまでの3つの教材では有効であったことから、小学校で扱われる多くの物語教材で有効な指導方法である可能性が高くなった。

しかし、この指導方法が読解力の向上に繋がっているかどうかを、これまでの実践では児童らの発言のみで判断しており、客観性があるとは言い難い。

そこで、クライマックスの一文を探す読み方をする学級と児童の思いのままの読み方をする学級で比較し、2つの学級で物語の読み方に差が生じるかを検証する必要がある。もし、その中で差が生じることがあれば、本研究の指導方法が読解力を向上させる上で有効であるかどうか明らかになる。

実践 4 「うさぎのさいばん」キム・セシル（三省堂3年）

クライマックスの一文検討が読解力の向上に繋がるかどうかを客観的に判断するために、ここでは、読解力を「叙述を基にして、物語の主題をまとめる力」と定義した。これは、読解力を「文章の意味を正しく理解する力」としたときに、文章を正しく読むことができれば、叙述に沿って主題をまとめることができると考えたからである。

5年生の2つの学級を対象に「うさぎのさいばん（三省堂3年）」を使って、児童自ら主題をまとめる実践を行った。ここで3年生の教材を選んだ理由は、文章量が少なく、内容の理解が難しくないのである。

A学級は、右のワークシートを使うことで実践3と同様の手立てでクライマックスの一文を探し出し、その後作品の主題をまとめるようにした。B学級の児童らは、このワークシートは使わずに、児童の思いのままに主題をまとめるようにした。クライマックスの一文を探す読み方をした学級と、思いのまま主題をまとめた学級とでは、まとめ方にどのような違いが見られるのかを比較した。

「うさぎのさいばん」ワークシート

一、わか者のとらに対する気持ちは？

③の場面では、とらのことをどのように思っていますか？

④の場面では、とらのことをどのように思っていますか？

二、わか者の気持ちはどうしてかわったのでしょうか？

三、どのように解決しましたか？

四、この話を一文要約すると

が、

によって、

する話。

五、クライマックスの一文を書き抜きましょう。

A学級（18人／30人中） 読解できたと判断した児童の割合＝60%	B学級（8人／29人中） 読解できたと判断した児童の割合＝28%
<ul style="list-style-type: none"> ・人間も植物や動物の命を大切にしなければいけない ・嘘をついてはいけない ・悪いことをしてはだめ ・悪いこともあればよいこともある ・感謝の気持ちをもたなくてはいけない ・よい行いや悪い行いは自分に返ってくる ・助けてくれる仲間がいること ・困っている人がいたら助けること ・自然界の怖さ 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間は動物や植物を大事にしよう ・自然を大切にしたい ・若者のように優しい心をもって生きてほしい ・恩知らず ・悪いことをしてはだめ

考察 4

表は読解できたと判断した児童の割合と主題をまとめたものである。この結果、読解できたと判断した児童の割合は、

A学級が60%だったのに対し、B学級は29%であった。このことから、クライマックスの一文を探す読み方は、思いのままの読み方よりも読解力を格段に高めるということが分かった。

主題を詳しく見ていくと、B学級の児童らが登場人物に対する感想で終始していることに対し、A学級は作品全体をまとめるような主題を記述する児童が多かった。特に「よい行いや悪い行いは自分に返ってくる」や「自然界の怖さ」がそれに当たる。クライマックスの一文を探す中で、一文一文を詳しく読もうとすることに加え、物語全体を捉えることができたと言える。

5 成果と課題

本研究は、国語科で養われるべき力である読解力の向上のために、どの物語教材でも共通する指導方法を明らかにするという目的をもって研究を進めた。これまでの曖昧な指導を脱却するために、明確な指導方法を確立しようと、クライマックスの検討に注目し、4つの実践を行った。そして、これをどの物語教材でも指導できるようにするために、必要となる3つの手立てを提案した。

その中でも、最も大きな成果として挙げられるのが、クライマックスの一文検討を、物語の一文要約を手立てにしたことである。二瓶によるクライマックスの定義は、「物語全体を通して、あること（中心人物の心）が最も大きく変わるところ」であったが、実践する中で、この定義だけでは論点にずれが生じやすかった。また、「最も大きくかわるところ」という抽象的な表現が児童らには理解しづらかった。それは「三年とうげ」の実践のように、中心人物の心情の変化の大きさよりも、最も気持ちが高揚している文に着目しやすかったことから分かる。

そこで、物語の変化に注目し、白石が提案する一文要約を取り入れることにした。これによって、物語の「何が、どうして、どのように変わったのか」を明確にすることができ、物語全体を捉えることに繋がった。実際、児童らが提案するクライマックスの一文は、学級全体で2文から3文程度まで絞りこめるようになり、これを学級で検討する学習の流れができた。この手立ては、「サーカスのライオン」だけでなく、「世界でいちばんやかましい音」、「うさぎのさいばん」でも有効であったことから、小学校で扱われる多くの作品で有効である可能性が高いことが分かった。

しかし、本研究における目的はどの物語教材でも有効な指導方法を明らかにすることであった。そこで本研究で扱った物語教材以外の教材で同様の手順を追い、クライマックスの一文を探そうとしたところ、手立て①③を講じることができない作品が存在した。例を挙げるとすれば「やまなし」（光村図書6年）がそれである。また、ファンタジーと呼ばれる物語教材は、「現実—非現実—現実」という構成になっており、本研究の手立て①のような四部構成に分けることが難しいことが分かった。このことから、本研究で明らかにした手立てを講じられない物語教材においては、クライマックスの一文検討が必ずしも有効な指導方法であるとは言えない。故に、クライマックスの一文検討ができる物語教材は、条件がある。それは、四部構成であり、その物語の中の2つの場面を比較したときに、「何が、どうして、どのように変わったか」が明確であるものである。つまり、本研究によって、典型的な基本構成をもった物語教材において、クライマックスの一文検討が有効であることが明らかになったと言える。

最後に、作品を読んだときには、読み手によるあらゆる解釈があり、答えが1つではないということは事実である。しかし、それ故に児童らが考える解釈の全てが正解だとする読み方も違う。本研究では、読み方を示した学級と、そうでない学級とで主題のまとめ方に大きな差が生じた。文章の意味を正しく理解するための読み方を指導することは、読解力を高める上で必要なのである。どの物語教材でも共通した指導をすることは難しいが、ある程度の枠組みの中で、指導方法を明確にしていくことはできる。本研究では、四部構成をもった作品における指導方法が明確になった。今後、ファンタジー作品やその他の作品の中で、指導方法を検討していくことが必要である。そのことが、物語教材における、明確な指導方法の確立へと繋がっていくと言えよう。

¹田近洵一、井上尚美 「国語教育指導用語辞典 [第四版]」教育出版 2009

²間嶋哲 「聞く・話す・読む・書く4Rsを育てるスモールステップ」 2008

³文部科学省 「小学校学習指導要領解説 国語編」東洋館出版 2008

⁴二瓶弘行 「物語 授業づくり 一日講座」文溪堂 2011

⁵山崎碧 「糸魚川小学校校内研究集録」 2012

⁶白石範孝 「国語授業のフルコース」 2011